
ケベック史におけるダンスパーティーの 社会的な位置付けについて

松川 雄哉

要 旨

Le présent article a pour objectif de discuter l'importance sociale des veillées de danse dans l'histoire du Québec. Durant la deuxième moitié du 17^e siècle, les habitants de la Nouvelle-France ont commencé à faire des veillées dansantes pour se divertir et lâcher leur fou. Pour eux, ces veillées constituaient un divertissement essentiel durant les longs hivers rigoureux québécois. Bien que la Nouvelle-France soit devenue une colonie britannique suite à la défaite de la guerre de la Conquête contre l'Angleterre en 1763, les Canadiens français ont continué à faire des veillées de danse. Cependant, les danses ont subi l'influence de la culture des immigrants écossais et irlandais au 19^e siècle. Au 20^e siècle, grâce à la Révolution tranquille, le Québec a connu beaucoup de changements sociaux qui ont permis aux Québécois d'améliorer leur situation dans la société canadienne et de renforcer leur identité culturelle. Cependant, à cause de l'urbanisation et l'augmentation des familles nucléaires, la tradition de la veillée de danse s'est transformée et les danses traditionnelles ont arrêté d'être transmises.

1. はじめに

伝統社会において、民俗的な音楽とダンスは、通過儀礼と密接に関わっている (R.-L. Séguin, 1986: 13)。地域によっては、結婚式のような式典の際に、バイオリンの音で参列者がお祭り騒ぎのごとく踊ることがある。また、季節的な祝祭の習わしの際にも夕食後にパーティーが行われ、演奏者と踊り手が

心ゆくまで楽しむ。日常生活においては、人々は歌や音楽を、秋のブドウ踏みや脱穀などの季節的な労働の中に取り入れる。その歌や音楽、リズムは人々をダンスに誘う。ダンスパーティーは、日々の仕事の疲れを発散し、働く活力を与え、家族や地域の結束を強める役割があった。子供たちは、早期から親の音楽やダンスの伝統を受け継ぎ、踊り手や演奏者となり、さらに次の世代に継承していく。このように、ダンスや音楽は単に娯楽である一方で、伝統社会における人々の社会生活や文化の発展を知る手掛かりとなる (S. Voyer & G. Tremblay, 2001: 7)。

ケベックでは 17 世紀後半から、入植者たちは頻繁に誰かの家に集まり、夕食後に夜通しでダンスパーティー (veillée de danse または bal) を行うようになった。当時はヨーロッパ起源のダンスが踊られていたが、ケベック史における社会の変化の中で、ケベックの伝統的なダンスは様々な移民の文化の影響を受けながら、独自の発展を遂げてきた。今日、このダンスの伝統は、民俗音楽愛好家による団体などが «veillée de danse (ダンスの夕べ)» と呼ばれる定期的に開催される夜のイベントとして今日存在している。

本稿では、ケベックにおける伝統的なダンスパーティーの習慣の歴史を概観しながら、その社会的な位置付けを論じる。先行研究では、ケベックにおける伝統的なダンスの歴史やダンスのステップやフィガーを扱うものは多いが、17 世紀から現代までのケベック社会における住民と伝統的なダンスパーティーの関係に焦点を当てた研究はほとんどない。

次節では、17 世紀初頭から 20 世紀までのケベックの歴史を、社会が変わるヌーヴェル・フランス時代、征服後、近代の三時代に分けて扱う。それぞれの時代について、歴史的な出来事を振り返り、その時代にケベックに滞在していた旅行者や作家の記録や日記を頼りに、当時のケベック社会において行われていたダンスパーティーの様子や踊られていたダンスについて紹介する。第三節では、現在 «veillée de danse (ダンスの夕べ)» と呼ばれているイベントやそこで踊られているケベックの伝統的なダンス、それからダンスの伝

統を守るための取り組みについて紹介する。最後に、ケベック人にとってダンスパーティーがどのような役割を果たしているかをまとめる¹⁾。

2. ケベック史におけるケベック人とダンスパーティー

2.1. ニューヴェル・フランス時代（17～18世紀）

1534年に冒険家のジャック・カルティエ（Jacques Cartier）が今のガスペの地にたどり着き、そこをフランス領「ニューヴェル・フランス」であると宣言した。その後、1608年にサミュエル・ド・シャンプラン（Samuel de Champlain）が毛皮貿易の拠点としてケベック市（ville de Québec：先住民の言葉で「狭い水路」を意味する）を建設した。彼は国王直属の地理学者であり、航海士であり、冒険家であり、ケベックの創設者であり、ニューヴェル・フランスの総督であった。ニューヴェル・フランスに入植した人々は、厳しい気候の中で悪戦苦闘しながらもこの地を開拓していった。1663年にはニューヴェル・フランスはフランス王国直轄となり、コルベールの重商主義政策の一環で毛皮だけでなく、小麦や木材なども営むようになった。また当時の地方長官であったジョン・タロン（Jean Talon）は、土地の区画整備や農地制を導入した。当時のニューヴェル・フランス住民の生活水準は、保有地の広さや税率の低さなどから、フランス本国よりも高かったと言われている（細川、2017:58）。さらに、「国王の娘たち」²⁾の政策で人口も増えていき、ニューヴェル・フランス社会は徐々に安定していった。

1) 本論のキーワードである「*veillée de danse*」の正式な日本語訳がないため、第二節では、夕食後夜通し行われていた「*veillée de danse*」または「*bal*」を「ダンスパーティー」と標記する。それに対して、第三節以降に紹介する、夜通しは行われない、ケベックの民族音楽や伝統的なダンスの愛好家の団体が企画する「*veillée de danse*」と呼ばれるイベントを「ダンスの夕べ」と標記する。

2) 1663年から1673年の間にフランス王国がニューヴェル・フランスに送った約800人の女性こと。彼女らの社会的地位や出身地は様々であった。

その一方で、ヌーヴェル・フランスはイギリスの植民地と隣接していたため、度々イギリスの侵略を受けていた。この小競り合いの中、1754年にフレンチ・インディアン戦争が始まった。フランス軍は1759年のアブラハム平原の戦いに敗れ、ケベックは陥落した。翌年、モンリオールも陥落し、ヌーヴェル・フランスはイギリスに征服された。その後、1763年にパリ条約が締結されたことで、ヌーヴェル・フランスは正式にイギリスの植民地となった。

ヌーヴェル・フランス時代のダンスパーティー

Chartrand (2000) によると、ケベックが建設された当初のヌーヴェル・フランス社会はまだ生活基盤が整っておらず、文化的な活動を行うどころではなかった。人々が集まってダンスパーティーを行うようになるのは、17世紀後半になってからである。

Séguin (1986) は、ケベックが建設されてすぐにダンスパーティーの習慣が根付かなかった理由を三つ挙げている。第一に、土地の開墾と農作がなかなか進まなかった。当時は家の中で脱穀作業をするよりも、ビーバーの毛皮の交易がより大きな利益をもたらしていたため、入植した男たちは、国や教会による社会的制約の及ばない森で自由に狩りをすることに楽しさを見出していた。そのため、田畑は荒れ、森を荒らす入植者に、原住民たちは怒りを募らせていった。この状況に、ヌーヴェル・フランス地方長官のジャン・タロンは、1671年10月20日に、あるお触れを出した。それは、「結婚適齢期の男性は、入植してきた女性（「国王の娘たち」）と、入植してから15日以降に結婚しなければならない」という内容で、これに従わなければ、独身男性は森に入ることを禁じられた。結婚し、家族ができれば男たちは家で仕事することになるだろうという思惑があった。だがこの脅しのような政策は無駄に終わり、男たちは依然として森に行くことを好んだ。

第二の理由は、入植者の定住地の問題にある。当時の入植者はコミュニティ

を作ってお互いの近くに住居を構えず、分散していた。そのため、常に原住民のイロコイ族の脅威に晒されていた。彼らに襲われた入植者は、「遠い隣人」に助けを求める前に惨殺されることもあった。このように、農家が孤立することで、ヌーヴェル・フランスの発展はなかなか進まなかった。そこで当時のヌーヴェル・フランス知事であったルイ・ド・フロンタナック（Louis de Frontenac）は、17世紀末に、住民たちがお互い身を寄せながら土地を切り開いていくような政策を17世紀末に打ち出した。それは、住民の土地を隙間なく配置し、二年間土地を放置した場合、または家を空けた場合、その土地の所有権を取り上げるというものだった。その結果、農地の収穫が増え、徐々に農民たちの生活に余裕が生まれていった。それに伴い、農家の隣人との交流が増え、一日の仕事が終わると、一緒に食事をしたり、トランプなどの娯楽をしたりして過ごすようになっていった。

最後の理由は、ヌーヴェル・フランスにおける人口に関する問題である。1608年にケベック市が建設された当時、入植者はたった27名であった。その後、ゆっくりと人口が増えていくが、しばらくは男女の比率が不均等で、男性が圧倒的に多かった。

17世紀後半のヌーヴェル・フランスにおける人口の推移

年	男性	女性
1665	2034	1181
1667	2406	1512
1681	5375	4302
1685	5897	4828
1688	5320	4749
1692	5930	5145
1695	6043	5843
1698	7391	6424

(Séguin, 1986 : 18)

この人口的な男女差はダンスパーティーを行うには深刻な問題であった。1663年から1673年にヌーヴェル・フランスにたどり着いた「国王の娘たち」のおかげで男女の人口差は徐々に埋まっていった。18世紀になると、ヌーヴェル・フランスにおける男女の人口のバランスが取れ、ケベック社会における生活基盤が安定してきた。その結果、ダンスや娯楽などを楽しむだけの余裕が住民の生活の中に生まれてきた。その後、イギリスによる征服が始まる前の18世紀のヌーヴェル・フランスは社会的に豊かで成熟しており、入植者たちは娯楽を楽しんでいた。

ヌーヴェル・フランスにおけるダンスパーティーの様子を描く文献は多くない。一番古い記述は、イエズス会の宣教師たちの日記を集めた『イエズス会士たちの日記』(Journal des Jésuites)の中に記されている。1645年、ある上流階級の婚礼の際に、二つのバイオリンで上流階級の人々が踊ったことが記されている。この場では、バレエのようなダンスが踊られていたようであるが、それ以上の詳しい記述は残っていない。1667年2月4日に、ルイ＝テアンドル・シャルティエ＝ド＝ロトビニエール (Louis-Théandre Chartier de Lotbinière) がケベックのプレヴォー裁判所法務官に任命された際にダンスパーティーが開かれた。この祝いはカーニバルのような盛り上がりを見せた。この頃から、イギリスによる植民地征服が始まるまで、ヌーヴェル・フランスのダンスパーティーは、ベルサイユを思わせるような雰囲気であった。それを率先していたのがヌーヴェル・フランス歴代の総督である。中には、自身の邸宅でフランス宮廷の豪華さを再現しようとする者もいた。特にルイ・ド・フロントナック (在任期間 1672年～1682年、1689年～1698年) は、夜宴やダンスパーティーを特に好んで開いていた。

トロワ・リヴィエールの総督の妻であったエリザベート・ベゴンが、1748年から1752年の間に義理の息子に宛てた手紙には、彼女を取り巻く上流階級の人々の様子が書き記してある。その中には末流貴族たちの間で流行っていたダンスパーティーに関する記述がいくつかある。

信じられないわ。あの敬虔なヴェルシェール婦人が、昨夜一晩中私たちを躍らせたのよ [……]。明日はラヴァルトリ婦人宅で、明後日はブラージュローヌ婦人宅でダンスパーティーがあるのは楽しみだわ。(M.E. Bégon, 1959: 14)

このように、当時の貴族たちが連日夜通しでダンスに夢中になっていたことがわかる。次の文面には、宗教的な祝祭の期間であっても人々は節度を越えてダンスパーティーを楽しんでいたことが伺える。

ダンスに夢中になっている人たちにとっては、パーティーの翌日に二日間の休息があるなんて運がいいわね。彼らは踊り死ぬんじゃないかって思ったわ。あの人たち、今日の朝六時まで踊って帰ったわ。これでは復活祭が何の意味も持たなくなってしまうわね。四旬節が始まる前の三日間の間行われるお芝居を見に行く人たちは特にそうね。(M.E. Bégon, 1959: 37)

その場にいた人々は、復活祭以上の盛り上がりで、朝六時まで我を忘れて踊っていた。ヌーヴェル・フランスの人々にとっては、宗教的な風習でさえも、よく食べ、よく飲み、歌いそして踊るための口実であった。一方で聖職者たちにとっては、ダンスパーティーは疎ましい習慣であった。特にダンスは、男女の身体的接触を伴うため、市民がダンスに夢中になることに頭を悩ませていた。実際、上述のシャルティエ・ド・ロトビニエールのパーティーが催された際、『イエズス会士たちの日記』には、「神は、彼らの行いが重大な結果をもたらさないことを望んでいます (JE, 1871: 353)。」と記されている。その数か月後、当時の司祭は、総督に公式な晩餐会でのダンスや自由すぎる娯楽を控えるように働きかけた。このような教会側の圧力はその後も続いたが、それでも市民は踊り続けた。敬虔な信者でさえ、たとえ教会に破門される危険があっても、パーティーを開いて踊っていた。

ヌーヴェル・フランス時代のダンス

17世紀後半のヌーヴェル・フランスでは、主にメヌエット (menuet) が踊られていたが、18世紀初頭になると、パリから入ってきたコントルダンス (contredanse) が流行する。元々は、17世紀にイギリスでカントリーダンス (country dance) と呼ばれていたダンスで、17世紀末にフランスに定着し、コントルダンス (または contredanse anglaise) と呼ばれた。文字通り、四人の女性の列と同数の男性の列が向かい合って (contre) 踊る。フランスでは、18世紀初頭にダンサーたちがコントルダンスを発展させ、同世紀後半にケベックに導入されるのだが、詳しくは次節で取り上げる。

2.2. イギリスによる征服後 (1763 年以降)

1763 年のパリ条約によってヌーヴェル・フランスがイギリスの植民地となってから、イギリスは本国の諸制度を導入してケベック植民地を治めようとしたがすぐに行き詰まってしまった。宗教の違いにより、当時のイギリス法の下では、カトリック教徒は議会議員になれなかったことが主な理由である。当時のケベック植民地におけるイギリス系住民と言え、1000 人ほどの商人であった。だが彼らは、ビーバーなどの毛皮の交易に魅力を感じていたため、議会への参加に興味がなかった。さらに、ケベック植民地に隣接していたアメリカ 13 植民地が、税金や経済政策を巡ってイギリス王国と対立していた。そこで、イギリスは植民地支配を安定させる必要があったため、当時ケベック植民地内で影響力があったカトリック教会を味方に付ける必要性を感じていた。当時のケベック植民地の初代総督であるジェームス・マレーと二代目総督であるガイ・カールトンは本国の政府に献言し、イギリスは 1774 年にケベック法を制定した。その結果、ケベックにおけるカトリック信仰の自由が保障され、フランス民法が温存されることとなった。これは、フランス系カナダ人 (ケベック人) のアイデンティティの存続が保証されたことを示している。

このケベック法にアメリカ 13 植民地が反発し、アメリカ独立戦争を経て 1776 年にアメリカが独立宣言をした。この宣言に、十万人の王党派（または忠誠派）が反対し、アメリカを離れた。そのうちの五万人がカナダへ流れ、さらにそのうちの一万人がケベック植民地に到来した。だが彼らは、フランス系が多く居住していたセントローレンス川下流域を避け、オタワ川の右岸まで上り、そこに定住した。彼らは、ケベック植民地でイギリスの選挙制議会、イギリス式の土地所有制度といったイギリス法体制を敷くよう要求し、ケベック法体制下のフランス系と対立していた。そして、1789 年に起こったフランス革命のケベック植民地への影響を懸念したイギリス政府が 1791 年カナダ法を發布した。この法律により、ケベック植民地は、フランス系住民が住むセントローレンス川下流域をロワーカナダ（Bas-Canada）、イギリス系が住む上流域をアップパーカナダ（Haut-Canada）の二つの地域に分かれ、それぞれに議会が設置された。さらに、ロワーカナダではケベック法が維持された。このように、イギリス政府はケベック植民地における二地域の宥和を図ったわけだが、実際のところ、ロワーカナダ（Bas-Canada）では、イギリス総督やイギリス人富裕商人が実権を握り、フランス系住民を支配していた。この寡頭制に反発したロワーカナダ植民地議会の愛国者党（parti patriote）党首のルイ＝ジョゼフ・パピノーは 1837 年から 1838 年の間反乱を起こした（ロワーカナダの反乱）。だが反乱はイギリス軍に鎮圧され、パピノーはアメリカに亡命した。この出来事は、フランス系カナダ人の中にケベック・ナショナリズム芽生えるきっかけとなった（竹中、2009：45）。一方で、アップパーカナダでも、議会を牛耳っていた「家族盟約」と呼ばれる特権的支配階層の一群による寡頭制が敷かれており、それに抵抗する改革派と民衆が 1837 年に反乱を起こした。

アメリカ独立戦争を経験したイギリス政府は、これら 2 つの地域でほぼ同時に起こった反乱を重く受け止め、原因究明のためダラム伯を現地調査に派遣した。1839 年にイギリス議会で提出された彼の分析の結果は、『ダラム報

告書』と呼ばれており、その中でダラム伯はアッパーカナダとロワーカナダを政治的に統合し、責任政府を設立することなどを勧告した。そこで、イギリス政府は1840年に連合法を可決し、翌年にはアッパーカナダとロワーカナダが統合され、「連合カナダ」となった。二つの地域はそれぞれ「カナダ・イースト」と「カナダ・ウエスト」と呼ばれる行政区となった。

だがこの政策も、政治的な行き詰まりを見せることとなった。主な原因としては、両行政区の議会における同一議員定数の割に常に人口格差があり、政治的に不安定な時期が続いたためだ。さらに、イギリスが旧植民地体制から自由貿易体制へ転換したことにより、植民地産品の輸出は大幅に減少し、連合カナダは大きな経済的打撃を受けた。このような政治経済的危機を打開すべく、西カナダの改革派のリーダーと東カナダの保守派のリーダーが連立政権を作った。さらに、連合カナダと沿海諸植民地の経済的連携の必要性が1864年9月にシャーロットタウン会議で討議され、連合カナダ植民地の連邦化案が考案された。同年の10月に開かれたケベック会議では、この連邦化案が再検討され、連合カナダと沿海諸植民地がそれに合意した。この案はそれぞれの植民地で審議されたのち、ニューファンドランドとプリンスエドワード島を除いた地域が承認に達した。イギリス政府は、英領北アメリカ植民地の統一によって、植民地の経済が安定し、そのことがアメリカに対する防衛強化になると考え、連邦化に前向きだった。ついに、1867年7月1日³⁾にケベック、オンタリオ、ニュー・ブランズウィック、ノヴァ・スコシアの四つの州からなる、カナダ連邦が誕生した。

征服後のダンスパーティー

1763年のパリ条約により、ヌーヴェル・フランスが正式にイギリスの植民地となって以降、ケベック人を取り巻く社会は目まぐるしく変わっていっ

3) 「カナダ・デー」と呼ばれる建国記念日である。この日、カナダの各地では催し物が行われる。

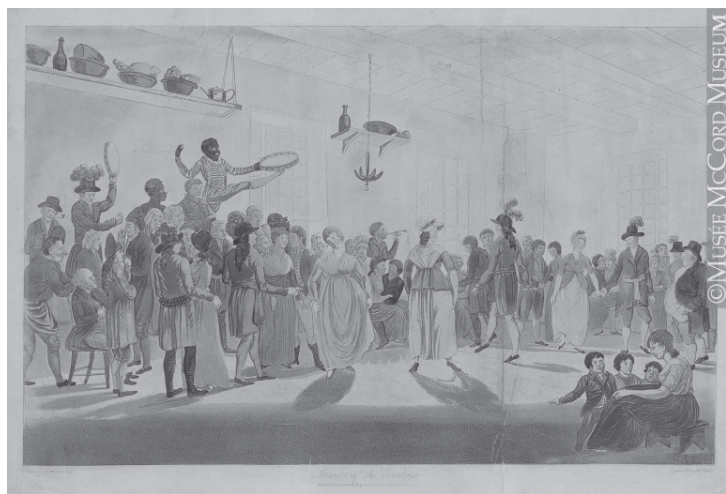
た。だが、彼らはすぐに征服の悲しみを乗り越え、本来の陽気さを取り戻し、ヌーヴェル・フランスの時代に確立したダンスパーティーの習慣は征服後も続いた (S. Voyer, 1986: 30)。イギリス人のガイ・カールトンがケベック植民地二代目総督に就任した際、彼の邸宅で盛大なダンスパーティーが催された。パーティーにはイギリス人だけでなくケベック市民も招待され、彼らはとても喜んだ (S. Voyer, 1986: 31)。

ケベックに滞在していた作家のフランシス・ブルック (Frances Brooke) が、1766 年に残した記録によると、ケベック市民はトランプをしたり、世間話をしたり、踊ったり、おいしいものを食べたりすることが大好きだった。翌年、彼女があるとても楽しい夜宴に出席した時のことを以下のように語っている。

ダンスパーティーがお開きになったのは朝の四時で、そこにいた人たちは全員、こんなに早く終わってしまうことを残念がっていたわ。もちろん、パーティーにはバイオリンの演奏があったわ。カナダには、バイオリン演奏がない夕食会はないのよ。何て精力的な踊り手たちなのでしょう！ (B. Dufebvre, 1950: 45)

カナダでの晩餐会では、バイオリンとダンスが欠かせなかった。さらに、ケベックでの経験を基に描かれたフランシス・ブルックの小説『エミリー・モンタギューの経歴』(Histoire d'Émilie Montague) では、主人公を通して、「[……] ここでは、人々は息を引き取るまで踊っているのよ。今週、あるフランス人宅で、娘と彼女の母親、そして祖母が同じダンスパーティーで踊っているのを見たわ (F. Brooke, 1770: 200)」と述べている。幅広い世代がダンスパーティーの場におり、まさに年を取って息を引き取るまでダンスを楽しんでいたことが想像できる。また、ジョン・ロング (John Long) は、あらゆる社会階層の人たちがダンスに夢中になっていたと述べている (J. Long, 1794: 297)。当時のカ

ナダを旅していたジョージ・ヘリオット (George Heriot) が描いた絵
« Le menuet des Canadiens (カナダ人のメヌエット) »にも、ダンスパーティー
の場に様々な社会階層がいたことがわかる。ほとんどがブルジョワであった
が、絵の左側には、椅子に座ってバイオリンを弾いている人の後ろに一般市
民、右端には商人、さらには、タンブリンを持って陽気に飛び跳ねる黒人の
様子も窺うことができる。



Le menuet des Canadiens (G. Heriot, 1807, Musée McCord)

ケベック植民地社会におけるダンスパーティーは、社会階級や身分など分
け隔てのない空間であったことがわかる。さらに、19世紀末にロワーカナ
ダを旅行したアイザック・ウェルド (Isaac Weld) によると、モントリオール
市民は社交的で、外国人にとっても親切で好意的であった。市民たちは、よ
く集まっては夕食を楽しんでいた。特に冬の間、市民たちは頻繁にコミュニ
ケーションを取り、結束力が強く、町がまるで一つの大きな家族のようであ
った (I. Weld, 1800: 315)。

征服後、イギリスやアイルランド、スコットランドからの移民が北アメリカに流入するようになった。そのことにより、それまでヌーヴェル・フランスで踊られていたダンスが徐々に移民の文化の影響を受けた。実際にケベックに滞在していたピエール・ド・ラテリエール（Pierre de Sales Laterrière）は1776年に、「カナダ人以上に踊ることが好きな国民に会ったことがない。彼らはフランスのコントルダンスをとメヌエットを踊り、そこにイギリスのダンスを織り交ぜている（P. de S. Laterrière, 1873: 61）」と述べている。特に19世紀のアイルランドでは、1832年にコレラが流行したことで、1845年から1849年にかけて流行したジャガイモの疫病による大飢饉が発生したことで、多くのアイルランド人がケベックに移民した。1847年には、89562人の移民がケベック市の港に着き、そのうちの約60%（54310人）がアイルランド出身であった（P. Chartrand, 2009: 383）。彼らの大部分は、ケベックに到着した時の荷物と言えば衣類とわずかな寝具だけだった。この不憫な状況に、ケベックの司教は、アイルランド移民たちが冬を越せるようにそれぞれの小教区が一家族を受け入れるように促した。その結果、ケベック市におけるアイルランド人の人口は1861年には13358人に上り、これはケベック市の人口の23%を占めていた。また、16%はイギリスやスコットランドの人口であり61%がフランス系カナダ人であった。このアイルランド人住民の存在がケベックのダンス文化に影響を与えた。アイルランド人の伝統的なダンスには速いステップで床を固い靴底で鳴らしながら踊るジグ（gigue）があり、このダンスが、ケベックのダンスパーティーで取り入れられた。

征服後のダンス

当時は、コントルダンスやカドリーユが踊られており、そこにアイルランドやスコットランド文化の影響をうけた。特に、速いステップが特徴のジグは、今日踊られているケベックの伝統的なダンスの特徴と言える。

先述したように、17世紀末にフランスに定着したイギリスのカントリー

ダンス (country dance) は、フランスでコントルダンス (または contredanse anglaise) と名付けられた。このダンスは、フランス人のダンサーの間で洗練され、1705 年、ダンサーでオペラ＝バレエ作家であるルイ＝ギヨーム・ペクール (Louis Pécour) がラウル＝オジェ・フイエ (Raoul-Auger Feuillet) と協力してコティヨン (cotillon) という新しいダンスを発表した。このダンスを行うには、男性二人、女性二人の計四人で、四角形を作る。この時、男性同士が対角で向かい合い、女性同士も同様に向かい合う。コティヨンは構造がシンプルで、冬のダンスパーティーの客に受け入れられた。18 世紀後半、このダンスは四つのカップルが四角形を作って踊られるようになり、「コントルダンス・フランセーズ (contredanse française)」と呼ばれるようになった。このダンスがいつケベックに入ってきたかを説明する文献はほとんどないのだが、Voyer & Trembley (2001) によると、1763 年のパリ条約以降であると推測している。前項に引用したピエール・ド・ラテリエールの 1776 年の記録には、コントルダンス・フランセーズが踊られていたことがわかる。

カドリーユ (quadrille) は、ナポレオン戦争が終わる 1815 年にケベックに入ってきたが、これまでケベックで踊られていたダンスと比べて全く新しいダンスというわけではなく、むしろ、18 世紀末まで踊られていた様々なコントルダンスをつなぎ合わせて生まれたダンスであった。「カドリーユ」は文字通り、男女のカップル四組が四角形を作って踊る。1820 年に初めてカドリーユがケベックで行われた。その後、このダンスはケベックで人気となるが、ダンスの学校や先生の影響が大きかった。

19 世紀はモンリオールやケベックシティで多くのダンス学校が開かれた。ダンスの先生は当時の最先端のダンスを取り入れることに必死になっていた。19 世紀の初めはこれまでのコントルダンスやメヌエットが主に踊られていたが、1820 年以降はカドリーユがダンス学校で教えられるようになり、このダンスはケベックだけでなくカナダで人気絶頂を迎えた。当時ダンスレッスンは上流階級の教養の一つであった。そのため、カドリーユは徐々

にダンスパーティーでも踊られるようになっていった。またダンスの先生が時折催す本格的なダンスパーティーは、富裕層の間で人気の冬の娯楽となった。

一方で、ケベック植民地におけるジグに関する最も古い記録は、19世紀の第二四半世紀までさかのぼる。特に詳しく、明白な言及が現れるのは、19世紀末から20世紀初頭である。多くのアイルランド人によってケベック社会に持ち込まれたジグは、時間とともに独自の発展をしていった。実際、ケベック・ジグ (gigue québécoise) は地域によってステップやリズムに違いがある (P. Chartrand, 2009: 382)。

ジグは、フィガーで構成されたコントルダンスとは異なり、地面を足で叩いたり、擦ったり、つま先で突いたりするステップダンスが基になっているダンスである。ジグダンサー (gigueur) は、敏捷さ、動きの器用さ、バランス、リズム感覚そして持久力に優れている。ダンスパーティーにおいて、ジグダンサーは人目を引く存在であり、高く評価されている。そのため、優れたジグダンサーをダンスパーティーに招待するということは、名誉あることであった。

20世紀になると、伝統的なジグダンサーは舞台やテレビ影響を受け、ジグは徐々にショーのためのダンスとして扱われるようになっていった。さらに、テレビや舞台で見られるタップダンスの影響を受け、今日ではタップシューズを履いてジグを踊るハイブリッドな「タップ・ジグ (gigue à claquettes)」が主流となっている。

2.3. 近代

20世紀中頃までケベック社会は、カトリック教会の影響が根強く、ケベック人の多くは農民で、保守的閉鎖的な社会に生きていた。その一方で、イギリス系商人がケベック経済を支配しており、フランス系住民との経済格差が問題となっていた。その原因は、1936年から1959年まで政権を握っていた

モーリス・ル・ノブレ・デュプレシ (Maurice Le Noblet Duplessis) の超保守体制な政策にある。彼はイギリス資本や海外企業を優遇していた。

この状況が大きく変わるきっかけとなったのが、1960年のケベック州選挙にて、自由党がユニオン・ナショナル党を破ったことだ。その後、十年のうちに様々な改革が行われた。自由党党首のジャン・ルサージュ (Jean Lesage) は、これまでカトリック教会が管轄していた医療や公共学校などの公共サービスを、脱宗教化し、電力会社の州有化、公的金融機関を設立するなど、フランス系住民の経済基盤の強化に打って出た。このような暴力を一切伴わない、急速な社会的改革は「静かな革命」と呼ばれている。その結果、農耕型社会から産業型社会へ、大家族から核家族へ、内向的社会から外交的社会へカトリックの伝統的価値観から脱宗教的価値観の社会へと変容していった。この近代化に伴い、ケベック人に自信が芽生え、「ケベコワ／ケベケコワーズ (Québécois/Québécoise)」としてのアイデンティティを強く持つようになった (矢頭, 2009 : 156)。このアイデンティティの形成に重要な一部となっているのが彼らのフランス語である。しかしながら、静かな革命後、ケベックにおけるフランス語の地位が改善されたわけではなかった。経済活動において影響力を持っていたのは依然イギリス系であり、従って優位言語はあくまで英語であった。1960年以降、出生率低下という問題に直面していたケベックは、人口維持のため英語圏やフランス語圏以外にも移民を受け入れるようになった。だが彼らの大部分は英語を習得することを選択した。その結果、ケベック州の人口が増えても、フランコフォンの人口の割合は低下していった。そこで、ケベック州におけるフランス語の地位を向上させるために、1977年、当時政権を握っていたルネ・レヴェック率いるケベック党はフランス語憲章を採択した。

近代のダンスパーティー

20世紀初頭からケベックでは都市化や核家族化が進んだ。その結果、ダ

ンスはこれまで口頭伝承という形で実践されていたのが、徐々にダンス学校のレッスンやアトリエといったフォーマルな場で実践・継承されていくこととなった。またダンスパーティーの伝統は、20世紀初頭から1960年の静かな革命以降に見られた都市化の影響を受け、徐々に都市部において行われていくこととなっていった。反対に、地方におけるダンスパーティーの習慣が少しずつ失われていくこととなった。

伝統的な共同体が解体されつつあるこの時代では、ラジオやテレビといったメディアが、伝統的なダンスの普及のために重要な役割を果たしたと言える。都市化により、多くの人々が農村から都市部に移住し、ラジオを聞くようになり、ラジオから流れてくる音楽に乗せて踊るようになった。1929年から、当時ダンスパーティーを企画していたコンラッド・ゴーティエ (Conrad Gauthier) やドナート・ラフルール (Donat Lafleur)、イジドール・ソーシー (Isidore Soucy) などが、モントリオールのラジオ局 CKAC (Canada Kilocycle America-Canada) の番組に出演するようになり、1931年には *Veillées canadiennes* というテレビ番組が CKAC と CFCF で始まった。伝承の方法も次第に口頭から紙媒体に移行していった。1940年から1950年にかけては、ダンスミュージックを流す番組に対応したダンスノートを出版した。

ダンスパーティーでは、新しく集めたダンスを次々に取り入れた。やがて1990年代には、伝統的なダンスと音楽は盛り上がりを見せた。ダンス人口の若返り、伝統的な音楽グループの増加、良質な音、ダンススクールの創設など、これらの動きは、伝統的なダンスがあらゆる世代を引き付けていたことを示している。

近代のダンス

今日、ケベックで伝統的なダンスとして踊られているのが「セット・カレ (set carré)」である。別名、セット・コーレ (set câllé), ダンス・コーレ (danse câllée) と呼ばれ、19世紀まで踊られていたコティヨンやコントロールダンス

を単純化させたダンスである。とはいえ、構成はまだ複雑で、踊り手はダンスレッスンを受けたり、フィガーを覚えたりするなどの努力が必要であった。ダンスの先生も、フィガーとその順序を説明したメモを手のひらに忍ばせ踊っていた。このダンスは、まずダンス学校で少しずつ人気となり、それからダンスが数少ない娯楽の一つであった農村部にも浸透していった。

アメリカで生まれたこのダンスは、スクエア・ダンス (square dance) と呼ばれ、19 世紀前半にその人口は瞬く間に増えていった。またこの頃、踊り手に次に行うフィガーやステップの指示を出すコール (call) が、バイオリン奏者やそれを専門とするコーラー (calleur) によって行われるようになった。踊り手は、このダンスのフィガーをいくつか覚えておけば、それを行う順番はコーラーの指示に従っていれば良いので、踊り手側の負担がかなり軽減された。そのため、誰でも気軽にダンスに参加できるようになった。

コーラーたちの中には、踊り手を楽しませるために、下品な言葉をコールに織り交ぜ音楽に乗せて歌う者がいた。また、才能のあるコーラーは、新しいスクエア・ダンスの振り付けを創り、当時人気があった歌に乗せて披露していた。一方でダンスの先生は、この「下流階級の鼻にかかった指揮」を受け入れず、批判していたが、このコール付きのスクエア・ダンスはアメリカの労働者階級の間で大きな支持を得た (S. Voyer & G. Tremblay, 2001: 98)。

このダンスは、アメリカで夏の間は農場、冬の間は工事現場で働いていたケベック人労働者たちによって、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてケベックに持ち込まれたと言われている。さらに、アイルランドやスコットランド移民の文化の影響を受け、このダンスはケベックで独自に発展していった。セット・カレの最後には、しばしばジグが行われるのが特徴である。ケベックにセット・カレが入ってきた当初は、ケベック人コーラーはフランス語しか話せなくてもコールは英語で行っていた。だが 1950 年にオリヴァ・レガーレ (Ovila Légaré) がコールをフランス語化したことにより、セット・カレはケベック人に親しまれるようになった。

3. 今日におけるケベックの伝統的なダンス

« Veillée de danse (ダンスのタベ) » は 2015 年、ケベック州文化・通信省によってケベック州の無形文化財として認められた。当時大臣であったエレヌ・ダヴィッド (Hélène David) によると、veillée de danse は、ケベック人の文化的アイデンティティにおいて重要な役割を果たしている⁴⁾。ラジオ、テレビ、インターネットなどのメディアに発達によって、今日のケベック人は社会的な制約を避け、個人化する傾向にある。ダンスのタベはそんな現実からの遊離を予防し、人々の社会化に一役買っている (P. Chartrand, 2002: 38-39)。ダンスのタベの参加者がセット・カレを成功させるには、初心者から熟練者まであらゆるレベルの踊り手を受け入れ、共にうまくやっていかなければならない。うまい人はそうでない人を助け、初心者同士でも助け合いながらダンスのタベは進行していく。このように、ダンスのタベは、フィガーやステップの美しさを求めるのではなく、人々の調和を実現することを目指している。まるで、移民を多く受け入れるケベック社会を象徴しているかのようである。

現在では、CVPV (Centre de valorisation du patrimoine vivant) や SPQTTQ (Société pour la promotion de la danse traditionnelle québécoise) といった、民俗音楽や伝統的なダンスの愛好家たちによって設立された非営利組織が定期的にダンスのタベを開いている。だが、以前のように夜通し行われることはなく、遅くとも日付が変わる前には終わる。また、クリスマスの時期や大晦日などといった伝統的なイベントや、3月から4月にかけてメープルシロップ製造者の小屋を訪れ、メープルシロップやケベックの伝統的な料理を味わうカバナシュクル (cabane à sucre) といったイベントにおいても民俗音楽や伝統的なダンスの愛好家たちが呼ばれ、音楽を披露したり、参加者たちと踊ったりすることがある。

4) https://www.mcc.gouv.qc.ca/index.php?id=2328&no_cache=1&tx_ttnews%5Btt_news%5D=7121&cHash=392a48ed00ee63c82a4f3515db0b6e42 (2018 年 9 月 15 日閲覧)

上述のように、今日ダンスのタベで踊られている「伝統的なケベックのダンス」と言えば、20世紀にアメリカから持ち込まれたセット・カレを指す。このダンスを行う上で欠かせないのがコーラーの存在である。参加者にセット・カレの動きやステップを説明し、踊りの最中にも細かい指示を与える。コーラーのおかげで、参加者は、セット・カレの振り付けを覚える必要がなくなった。また経験者は、初心者を助け、初心者同士でも助け合いながらセット・カレは進行していく。そのため、繰り返し踊っているうちに初心者でも気づいたら踊れるようになっていく。

現在、コーラーの業界を牽引しているのが、ジャン＝フランソワ・ベルティオーム（Jean-François Berthiaume）である。彼の公式サイトでは、11分ほどのレポルタージュを視聴することができ、この職業を垣間見ることができる⁵⁾。ここで、レポルタージュ内の彼の証言をいくつか取り上げたい。

（伝統的な音楽を収集するには）三つの方法がある。レコード、アーカイブ、そして直接人に聞きに行くことだ。つまり、お年寄りに、その地域で歌われていた当時の歌を歌ってもらい、それを録音し、使用しても良いかの許可を取る。（J.-F. Berthiaume, 2013）

このコーラーには、ダンスのタベを取り仕切るだけでなく、伝統文化の保護という重要な任務がある。レコード屋でセット・カレ用の音源を探し、実際に農村に住む高齢者を尋ね、この地ではどのようなダンスが踊られていたか、またどのような音楽や歌を使っていたかを探ね、資料化し保存するのである。

伝統とは、流行することが重要なのではない。伝統とは、常にそこにあること。それだけだ。だからこちらから伝統を収集しに行く必要がある。伝

5) <http://calleur.ca/>（2018年9月25日閲覧）

統の本流から離れすぎてしまわないように、ダンスがそこで踊られていた事実や歴史を探しに行く。流行するものは本来の伝統の形から離れてしまう。そして流行は、いつかは流行ではなくなり。忘れ去られてしまう。(J.-F. Berthiaume, 2013)

彼が直接現地に赴くのは、伝統をそのままの形で保存することを大切にしているからである。ある伝統が流行してしまうと、大衆に向けてその時代に合った形に変えられてしまう。そうなるともはや伝統とは言えず、その流行が終わればその伝統は忘れ去られてしまう。

(ケベック州の地図を見ながら) ダンスは、ケベックの全ての地域で存在していた。だが、ダンスが全く見つからなかった地域もある。それには何か原因があったはずだ。もしかしたらそこで踊っていた人が全員亡くなってしまい、そこでダンスが継承されなかったのかもしれない。もしくは、以前他の地域では行われたダンスの資料化の作業がこの地域では行われなかったからだろう。コーラーが亡くなった地域では、皆こう言う「ダンスを指揮していたのは彼だから、彼がいなければ踊り方は知らない。」このように、ダンスは人知れず失われていってしまう。(J.-F. Berthiaume, 2013)

伝統的なダンスは、ケベックの全ての地域で存在するが、地域によっては、そこで踊られていたはずのダンスが残っていない。踊っていた人が亡くなったしまったか、ダンスを伝承しなかったか（あるいは伝承する若い世代がいなかったか）、あるいは文書として記録・保管する人がいなかったのが原因であるとベルティオームは推測している。20世紀に入ってから急速な都市化による核家族化によって、かつては当たり前のように踊られていたケベックの伝統的なダンスの継承が途切れ、そのまま失われてしまった、（あるいはまだ発見されていない）と考えられる。このように、ケベックの伝統文化保護のためにはコーラーの存在は不可欠であるが、この職業は決して華

やかな職業とは言えない。

例えば「私の職業はコーラーだ」と言うと、それを聞いた人は確実に「君はすごい狩人なんだね」と言うんだ。以前、家を買うためにローンを組んだ時、私はこの髭と身なりで、ジグダンサーでコーラーだと説明したら、「うわ、変な人」って言っているような反応だった。結局、ローンの額はそれほど良くなかったよ。あの時は本当に大変だった。(J.-F. Berthiaume, 2013)

字のごとく、コーラー (câleur) という職業は、動物を声真似でおびき寄せる狩人と間違えられるほど、社会的にはあまり認知されているとは言えない。ルポルタージュで見られるように、彼はコールをする際でも、シャツとジャケットとジーンズ、時にはキャップという比較的ラフな格好をしている。彼の豊かな髭と身なりは、伝統的なダンスを仕切るコーラーという職業の雰囲気を出すのに役立っている。だがその反面、ローンを組む際にも苦労がある。彼のようなケベックの伝統的なダンスに情熱を持った人たちの努力でケベックの伝統文化が守られている。

4. まとめ

本論では、17 世紀から 20 世紀までのケベックの歴史を三つの時代に分け、それぞれにおけるダンスパーティーの様子について紹介した。17 世紀、ケベックの入植者たちは、ヌーヴェル・フランスの地を開拓し、徐々に社会基盤を整えていった。17 世紀後半になると、日々のつらい仕事の憂さを晴らし、寒く厳しい冬を楽しく過ごすために夕食後にダンスパーティーを行うようになった。

ヌーヴェル・フランスがイギリスに征服された後は、1774 年のケベック法のおかげでフランス系のアイデンティティが守られたものの、社会は常に

イギリスに翻弄され、頻繁に変容した。しかしながら、ケベック植民地の住民は相変わらずダンスパーティーを楽しんでいた。ガイ・カールトンがケベックのイギリス人二代目総督に就任した際に開かれたダンスパーティーには、ケベック市民が招待され、彼らは喜んだ (Voyer, 1986: 31)。またケベック人たちは、外国人に寛容であったこと (I. Weld, 1800: 315) やアイルランドやスコットランド移民のダンスを取り入れていたこと (P. Chartrand, 2009: 382) から、当時のダンスパーティーには、様々な国籍が存在していたことが想像できる。さらに興味深いことに、18世紀後半から19世紀初頭にかけてカナダに滞在した人たちの記録によると、当時、様々な社会階級と老若男女がダンスパーティーの場に存在していた (F. Brooke, 1770: 200; J. Long, 1794: 297)。ケベックが建設された17世紀は人口が少なく、常に外敵の脅威に晒されていた上に、冬が厳しかった。そのため、この頃から住民と統治者との結束が強く、恩情のある父権政治がヌーヴェル・フランス社会の一つの特徴だった (竹内, 2009: 40)。このような社会環境において、ダンスパーティーは、社会階級、国籍、世代を超えて人と人との結束を強めることができる重要な場であったと言えるだろう。

20世紀半ばには、「静かな革命」が起こり、これまで経済的にイギリスに支配されていたケベックは、自らの経済的基盤を整えていった。常にイギリス系カナダ人に対して劣等感を抱いていたケベック人の意識も変わり、ケベック人として自信を持つようになった (竹内, 2009: 50)。しかしながら、イギリスによってヌーヴェル・フランスが征服されても変わらなかったダンスパーティーの伝統は、都市化や核家族化によって大きく形を変えてしまった。かつてはそれぞれの地域や家族内で口頭伝承されてきたダンスは、ダンススクールやダンスパーティーの団体が企画するアトリエ、ラジオやテレビなどのメディアによる方法で継承されるようになった。

20世紀半ばにアメリカから持ち込まれたセット・カレには、踊り手のステップや動きに指示を与えるコーラーがいるため、参加者は予めダンスを練

習して来る必要がなくなったため、誰でも気軽にセット・カレを実践できるようになった。今日では、昔のように頻繁にダンスパーティーが行われることもなく、定期的に催されるダンスのタベと呼ばれているイベントも、朝まで行われることもなくなった。だが、特に人との交流が希薄になりつつある現代のケベック人にとって、ダンスのタベは、伝統的な音楽に浸りながら、ケベック人としての文化的アイデンティティを再認識し、昔のように年齢や社会階級、国籍関係なく人と人との交流を楽しむことを思い出させてくれる娯楽としても、ケベック社会の中では位置付けられていると言えるだろう。

今日、ケベックの伝統的なダンスは、ケベックの伝統文化に情熱を持ったコーラー、民俗音楽家、CVPV や SPQTTQ といった非営利組織の活動によって支えられている。また、ケベック州文化・通信省の文化政策の役割も重要であるが、今後、この伝統文化が継承されていくには、このダンスの人口を維持し、欲を言えば増やしていく必要があるだろう。しかしながら、現代のケベックの生徒や学生は伝統的なダンスを習う機会がなく、ダンスのタベの存在自体もあまり知られていない (Conseil québécois du patrimoine vivant, 2016)。それから、ケベックの伝統的なダンスはケベックの移民にも普及しているのだろうか。ケベックは、文化的多様性を尊重する地域であり、毎年数万人の移民を受け入れている。だが、今後ケベックの人口における移民の割合が増えることによって、ダンスのタベのような伝統文化は縮小の一途をたどっていくだろう。ダンスのタベに参加している移民の割合や、その理由、そしてケベック州文化・通信省の今後の文化政策などに関する問題は、今後の調査課題としたい。

参考文献

- Bégon, M.E. (1959). *La correspondance de Mme. Bégon, 1748-1753*, Québec: Archives de Québec.

- Chartrand, P. (1997). Du set au cotillon... Petite introduction à la danse traditionnelle québécoise et à ses genres... *Centre Mnémo*, vol. 1, no.4. Repéré de:
<http://mnemo.qc.ca/bulletin-mnemo/article/du-set-au-cotillon-petite>
- Chartrand, P. (2000). La danse en Nouvelle-France. *Centre Mnémo*, vol.5, no.1. Repéré de:
<http://mnemo.qc.ca/bulletin-mnemo/article/la-danse-en-nouvelle-france>
- Chartrand, P. (2002). La pratique de la danse traditionnelle, d'hier à aujourd'hui. *Cap-aux-Diamant*, numéro hors-série, 36-39. Repéré de:
<https://www.erudit.org/en/journals/cd/2002-cd1044422/8079ac.pdf>
- Chartrand, P. (2009). La gigue québécoise dans la marge de celle des Îles britanniques. *Port Acadie*, 13-14-15, 381-389. Repéré de:
<https://www.erudit.org/fr/revues/pa/2008-n13-14-15-pa3491/038443ar/>
- Conseil québécois du patrimoine vivant (2016). La danse traditionnelle québécoise: les traditions culturelles du Québec en chiffre, vol. 2. Récupéré de:
<http://patrimoinevivant.qc.ca/wp-content/uploads/2016/03/La-danse-traditionnelle-quebecoise-2016-2.pdf>
- Dufebvre, B. (1950). *Cinq Femme et nous*. Québec: Bélisle.
- Brooke, F. (1770). *Histoire d'Emilie Montague* (J-. B. Robinet, Trad.). Paris: Le Jay. (Œuvre originale publiée en 1769).
- Laterrière, P. de S. (1873). *Mémoires de Pierre de Sales Laterrière et de ses traverses (1873)*. Québec: de l'imprimerie de l'Événement.
- Le journal des Jésuites: publié d'après le manuscrit original conservé aux archives du Séminaire de Québec*. Québec: chez Léger Brousseau, imprimeur-éditeur, 1871.
- Long, J. (1794). *Voyage chez différentes nations de l'Amérique Septentrionale... avec une description des postes du Saint-Laurent*. Paris: chez Prault.
- Séguin, R-L. (1986). *La danse traditionnelle au Québec*. Québec: Presses de l'Université du Québec.
- Tremblay, G., & Voyer, S. (2001). Quadrille, cotillon, reel, brandy... : tout le monde danse! *Cap-aux-Diamant*, 67, 38-44.
- Voyer, S., & Tremblay, G. (2001). *La danse traditionnelle québécoise et sa musique d'accompagnement*. Québec: Les Presse de l'Université Laval.
- Voyer, S. (1986). *La danse traditionnelle dans l'est du Canada*. Québec: Les Presse de l'Université Laval.

Weld, I. (1800). *Travels through the states of north America and provinces of Upper Canada, 1792-6*.

London: Stockdale.

細川道久 (2017) 「フランス植民地の建設－アカディアとケベック」 細川道久編著『カナダの歴史を知るための 50 章』 明石書店 pp. 54-59

竹中豊 (2009a) 「フランス的事実のルーツ」 小畑精和・竹中豊編著『ケベックを知るための 54 章』 明石書店 pp. 36-41

竹中豊 (2009b) 「イギリス領以降のケベック」 小畑精和・竹中豊編著『ケベックを知るための 54 章』 明石書店 pp. 42-47

矢頭典枝 (2009) 「フランス語憲章」 小畑精和・竹中豊編著『ケベックを知るための 54 章』 明石書店 pp. 154-162

Web サイト

Ministère de la Culture et des Communications (Gouvernement du Québec). (2015, mars 21). La veillée de danse désignée comme élément du patrimoine immatériel du Québec.

Récupéré de:

https://www.mcc.gouv.qc.ca/index.php?id=2328&no_cache=1&tx_ttnews%5Btt_news%5D=7121&cHash=392a48ed00ee63c82a4f3515db0b6e42

オンライン動画

Berthiaume, J.-F. [Toast Studio]. (2013). *Savoir-faire: : c  lleur*. [vid  o]. R  cup  r   de <http://calleur.ca/>

略号

JE:『イエズス会の宣教師たちの日記』 (Le journal des J  suites)